

東京電機大学校友会

千葉県支部だより

第6号

平成15年1月29日

事務局
千葉市稲毛区緑町 1-5-8
高率電設(株)内
TEL 043-242-1539

■六号発刊に当り

支部長 小川 重二

千葉県支部校友会皆様お元気ですか。

依然として厳しい政治と経済それに加え拉致問題、更にはイラク問題等々いつに成ったら安心した世の中が出来るのでしょうか、このまま後世に引き継ぐ様では平成の人達とは未代まで、いや先祖までが悲しくて怒り狂う事でしょう、でも皆それぞれ立場で精一杯

やって来たと思う、戦後復興も他国にない日本の復元力見せて下さった先輩方もろん其の血は平成の人々にも伝わって居るはずだ、其の証拠に今年は日本人では二人のノーベル賞を獲得した、暗い話の中唯一の明るい話であった、受賞された田中耕一さんの会社は戦前から母校のすぐ側に東京の事務所がある、よく学校向けの直流装置を買った身近な会社で身近な人が受賞され、ノーベル賞も身近になった感じがして来た。

尚東京電機大学元学長中野道夫先生が秋の文化の日に勲三等旭日中授章の叙勲の栄誉に、また前広川利男理事長先生にも本年春同じく勲三等旭日中授章の叙勲の栄誉に浴され夫々お祝いの会を挙行されました。

校友会全国支部は現在四十四の支部となり学園の丸山理事長始め校友会横田理事長、事務局面々が東奔西走されて居ります。尚平成14年11月16日東京電機大学が新制大学として誕生後、第一回の卒業生を送り出した昭和27年に発足して、本年にて記念すべき50周年を迎えその行事が椿山荘プラザで挙行されまし

た。

千葉支部は総会で了解された見学会を11月22日、23日に掛け実行しました。三千人強の会費納入会員への呼び掛けは非常に困難なため、役員と春の総会に出席と通知を頂いた方のみご案内致しました。尚本部からは小田部局長に参加頂き総勢14名の予定でしたが2名欠席となり12名の参加でした。

見学場所は22日が相模川系城山発電所(揚水式)見学、励磁機内部、送水管からの案内井いづれも大きく70,000kw×4台、で昼は発電機、夜は揚水ポンプで湯水の心配ない発電所です。1時間半程度案内して頂き次は山梨登美の丘サントリ-醸造所を見学し5時頃宿に着いた宿では、次期総会についての臨時役員会を開催、翌23日は山梨県立リニア見学センターにてリニア走行実験と超伝導の走行資料などを見学し、4時頃家路に着いた。

反省点は早目にアンケート、参加料金、グループからの呼びかけ、参加日等々今後考えて進めたいのでご提案有りましたら事務局までお寄せ下さい。

■お知らせ・市川OB会

市川市議 杉沢 順一

東京電機大学 脇英世教授講演 「未来都市に求められる情報化社会」三月九日(日) 12時~14時。場所(勤労福祉センター分館)無料

■情報処理の基礎教育について

東京電機大学 情報環境学部長 中村 尚五

情報環境学部が千葉ニュータウンキャンパスに開設して一年半が経過いたしました。発足当時、「千葉県支部だより」に学部の特徴や抱負などを述べさせていただきましたが、それらがどのような経過を辿っているかをお知らせし、今後の展望など学部の願っていることを述べさせていただきます。

先にお知らせいたしましたような学部のいくつかの特徴は、他大学や企業等の関心を得られて、少しずつではありますが外部に知られるようになって参りました。これまでに問い合わせの多かつた事項は、単位従量制という履修する科目の単位数に応じて授業料を支払う授業料システムについてです。これに付

きましては外部のセミナー等の求めで講演させて頂いたり、直接、他大学の先生や事務の方々がお出でになるなど、単位従量制授業料について世の中の関心の高さを感じております。

情報環境学部に入学した学生が最初に取り組む科目は導入科目といわれる2週間の集中講義科目です。午前と午後に分かれ、午前中はカリキュラム計画という科目で、個々の学生の卒業までのカリキュラムを作成させるというものです。これは新入生にとって可なり難しい作業です。そのためにダイナミックシラバスというコンピュータシステムを用意し、それを使いながらすべての学生が何とか卒業までの自分自身のカリキュラムを作成します。学生達はダイナミックシラバスをweb上で使いながら分からないところは教員に質問することで彼らの目標を達成していきます。その過程でネットワーク接続やメールによる文書の提出など多くのコンピュータリテラシー

を経験することになります。また、彼らが作成した卒業までのカリキュラムは毎年バージョンアップさせます。したがって、個々の学生は卒業時期まで毎年、自分が履修する科目についての意義をリフレッシュすることになります。何らかの目標のために学習することは、何となく単位を修得するために学習することに比べ、何倍もの効果があるものと期待しているところです。ここで話しましたダイナミックシラバスは本学部の教育を遂行するためには必要不可欠のシステムになっております。先に述べました単位従量制による科目履修登録や通常の科目の内容やその教育スケジュール、ほとんどの連絡事項などがこのシステムにより学生たちに伝えられます。学生たちはノートパソコンを所持し、無線LANも接続されており、キャンパスの至るところで各自のノートパソコンから必要な情報を得ることができるようになっております。勿論、自宅からでも電話回線等でアクセスすることは可能です。このような機能は少し前まではそれほど自由には享受できなかったものです。学生にとっても教職員にとっても非常に便利な機能です。便利であるということはいずれ当たり前になるでしょう。しかし、当たり前前の便利さで終わらせるのではなく、このような機能により、従来行われていた大学教育に新しい手法を一つでも二つでも追加できるように本学部は努力しなければならぬと感じております。

また、今年からスタートしましたプロジェクト科目という企業との連携プログラムは日経新聞の首都圏経済欄にも大きく取り上げられ、特に産業界からの関心を得ております。この科目は企業等から学生向けのテーマを出していただき、学内の1セメスターを使っ

て、そのテーマの目標に従って学生が解決する正規科目です。最終的には成果報告を学内あるいは企業で実施し、評価を受けるというものです。学生主体でテーマの解決に望むのですが、時には学内のアドバイザー教員や企業の担当者のアドバイスを受け、より高いレベルで目標に向かうよう学生たちは努力します。これに関してはこの9月より基礎プロジェクトBという科目がスタートし、およそ180名ぐらいの学生が何らかのテーマに取り組んでおります。まだ基礎レベルのため企業からのテーマは20程度で、学内の教員から出されたテーマが多いという状況です。

来年度から始まる開発型プロジェクト科目はむしろ企業からのテーマが多くなると思います。まさに産学連携の新しいスタイルが定着するのではないかと期待しております。学生たちが取り組んだテーマの成果は企業との協議の上、可能なものはデジタルライブラリーへ登録し、web上で誰もが参照できるようにする予定です。卒業生の皆様のご関心のある方は次のURLからテーマ登録等が随意にできるようにしておりますので是非ご協力頂ければと思います。

プロジェクト科目の
URL: <http://proj.sie.dendai.ac.jp>
プロジェクト科目は次に示すような手順で実施することになっております。

- # 大学より企業へテーマの募集（現在は任意に登録できます）
- # 企業からテーマの提案
- # 企業名を伏せてテーマの一覧を電子掲示板に提示、学生からの応募を募る。テーマには定員を明記します。
- # テーマに対し定員以上の応募があった場合、企業担当者と教員が面接等により、テーマ実施の学生を选考します。

合、企業担当者や教員が面接等により、テーマ実施の学生を选考します。
プロジェクト科目はセメスターで開講されるため、原則として4月から7月初旬までのテーマ、9月から12月初旬までのテーマとして扱われます。しかし、受付は随時です。

テーマの内容は基礎プロジェクトに関しては、新入社員を想定するか通常のアルバイトなどに依頼するようなものでも可能。社内で社員の手を煩わすほどではないが、やっておくといずれ役に立つであろうと考えられるようなものなどが適しています。開発型プロジェクトは上記以外のテーマでセメスターの期間で解決できると企業においても助かるような種類のテーマが適しています。

この他、情報環境学部では新しい種々の取り組みを行っております。どれ一つを取りましても完成度を上げるためには相当の努力が必要です。卒業生の皆様のご声援が何よりの励みになります。これからも宜しくお願ひ申し上げます。

■ 「ITS」を支える「交通工学」という分野について

科学警察研究所交通部長 齋藤 威
平成十四年十一月十六日(土曜日)は、東京電機大学同窓会の創立五十周年の記念式典ならびに祝賀会に出席しました。母校の関係行事に出席したのは卒業以来はじめてのことでした。懐かしい先生方をはじめ、たくさんの方々の方々と懇談し実に楽しいひと時を過ごすことができました。その席で同窓会千葉県支部の松本宏さんにお会いすることができ、

それが切っ掛けでこの原稿を書いています。小生は、昭和四十六年三月に第二部電機工学科を卒業して以来今日まで一貫して国家公務員の研究職として自動車交通問題の研究に携ってきました。勤務先の研究所が平成十一年に東京都内から千葉県柏市に移転してきましてので、千葉県支部とは全く無縁でもないので、千葉県支部とは全く無縁でもないのかなと思っております。

電機工学を専攻していた私が自動車交通の分野に関心を持ったのは、卒業当時に全国的に整備されようとしていた「自動車交通の広域信号制御」に興味を持ったからです。各交差点の信号機を互いに連携させて電算機によって最適化を図ろうとするものです。信号機も電算機も電機工学にかかわりのある分野なので、ほとんど違和感はありませんでした。

このような分野は、自動車交通の普及とともに確立され交通工学(Traffic Engineering)と呼ばれています。電機工学とは大きく異なる分野であり、その内容は道路の計画、設計、私が専門とする道路交通の運用の三つに大別されます。「交通工学」としての学問領域が確立したのは、自動車交通社会の到来が早いアメリカでさえも二十世紀に入ってからで、この分野の最も代表的な学会である米国交通工学研究会(the Institute of Traffic Engineers)の創立は1930年のことでした。わが国では昭和三十年(1955年)の第三回日本道路会議の座談会において取り上げられて以来、関連雑誌等で特集されるなどして学問領域として定着してきました。そして、わが国の大学に「交通工学」が創設されたのは昭和三十六年(1961年)の日本大学が最初ではないかと思われまので、まだまだ四十年余りと日の浅い学問分野といつことになりま。

「交通工学」の目的は、安全で円滑かつ生活環境に配慮した自動車交通の実現です。そのための方法論は様々ですが、私の専門は、交通信号機による交通流の制御(交通信号制御)であり、これによって目的とする自動車交通を如何に実現するかといったことです。研究では、道路交通場面で発生する様々な交通事象とその背景にある関連要素についての知見も必要になります。交通の源となる「人や物の移動需要」の発生や「移動手段」の選択の仕組み、移動時刻や所要時間の特性など、交通需要が道路交通となつて顕在化する過程や、これに関連する土地利用や道路整備に関する特性なども背景にある関連要素です。

研究で最も重要になるのが交通現象の分析と特性の解明ですが、既にいくつかの基本的な特性は明らかにされています。交通流の場合を例に挙げると、車の到着分布は条件付でポアソン分布などの理論分布で近似できること、前車に追従する後車の追従行動は刺激・反応モデルの適用で近似できること、交通量と速度と交通密度の相互の関係は、圧縮性流体としてみた流体力学理論で近似でき、その結果は追従モデルと整合していることなどであります。これらは、「交通工学」の中の「交通流理論」として知られているものですが、まだまだ特性化されていない現象も沢山あります。従って、交通信号制御によって交通量の最適化を図ろうとする場合には、最適手法そのものよりも、そこで用いる交通流要素の抽出とその特性の解明が必要であり、むしろ重要になります。とは言え、これまでの知見を基にした交通信号制御システムは既に実用化され、これまでに全国の約百七十都市に導入されています。都市内の主要な道路に配した車両感知器によって交通量や速度などを自動計測し、この情報を基に、道路網内の渋滞な

などを最小にするための信号制御の内容を時々刻々に自動計算し実行するシステムです。既に交通渋滞の解消・緩和や交通事故の抑止・減少をはじめ自動車による交通公害の緩和など所要の効果をあげてきています。

よつて、最近における ITS の流れの中で、その交通版として、ITS (Intelligent Transport Systems : 高度道路交通システム) に関する研究開発と実用化が活発になってきています。最先端の情報通信技術等を用いて人と道路とを一体のシステムとして構築することにより交通管理の最適化、道路管理の効率化、安全運転の支援等を図ろうとするものであり、その目標は、「安全まで円滑さらには環境にやさしい道路交通の実現」にあり、「交通工学」の目的そのものであります。

既に実用化しているものの中には、従来からの信号制御システムに情報提供等の新たな機能を付加した交通管理システム(UTMS)をはじめ、自動料金収受システム(ETC)などがあります。これらは ITS 構想のほんの一部に過ぎません。実用化が進まないのは「交通工学」で最も重要な「交通現象の分析と解明」が不十分のまま、単に新たな情報通信機器や装置などを集積したシステム化を図ろうとする向きが多いためと考えられます。

ITS を支えるのは「交通工学」であり、ITS の成否の鍵は「交通現象の解明」にあることさえも断言できます。自動車交通は生き物です。生き物の性質や特徴を十分に知った上でのシステム化が必要不可欠と考えられるためです。さらに、ITS 構想の中には自動運転のようなシステム化の方向もありますが、その方向には賛成できません。そのようなシステムが実用化した場合には、人が自身の安全のために最小限具備すべき能力が退化する

ことが心配されるためです。どんなに高度なシステムができてよつても、社会で生活する人には、安全な行動のために必要となる最小限の能力が備わっていることが不可欠です。そのような能力の衰退を招くのではなく、その水準の維持に繋がるようなシステムであつて欲しいと願っています。

憧れのヒマラヤ・トレッキング

田中 豊明

一〇月三日成田発、カトマンズへ、二四日カトマンズ滞在(マウンテンフライトと市内散策をした)、二五日空路ルクラへ、二六日トレッキング開始、モンジヨ迄、二七日ナムチェバザール迄、二八日ナムチェ滞在(高所順応を兼ね、ホテルエベレストビュー、コム

ジュン、クンデを一回りして来た)、二九日タンポチエ迄、三〇日タンポチエ滞在(パンポチエ往復して来た)、三一日タンポチエ滞在、一月一日ナムチェ迄、二日パクティン迄、三日ルクラ迄、四日空路カトマンズへ、五日カトマンズ滞在(カカニの丘へ落日のヒマラヤを見に行った)、六日空路ポカラへ、七日ポカラ滞在(ペワ湖、パタレ・チャンゴ等ポカラ散策した)、八日カトマンズに帰る、九日カトマンズ滞在(世界遺産のバクタプルに行き散策をした)、一〇日カトマンズ滞在(ナガルコットに朝焼けのヒマラヤを見に行った)、一日上海、関空、伊丹、經由、羽田へ、以上のよう

な予定である。平成二三年一〇月三日成田を十時に出て、香港で乗り継ぎ、暗くなってカトマンズに着いた。入国手続を済ませ、エージェンツの迎えの車で、シエルパホテルに向かった。チベットの民族衣装をつけた「立派なおっさんドラーボーイ」にニルピー(三円五〇銭)差し

出したら、合掌して「ダンネバー」と歓迎されて、チエックイン、部屋に到着した。

今朝は早く「マウンテンフライト」のため空港に行った。国内線の出発ロビーは、人種の見本市だ、放送があつても分かりにくい、間口一問程の出口に、案内係が来るかと大勢集まって、搭乗券を見せながら確認して出て行く、二十数人乗りの飛行機が、国内各方面に飛び立って行く。

我々が乗った飛行機は機体に、ヒマラヤの山並みが描かれた、二十二人乗りの双発のプロペラ機だ、飛び立って、遠くに白い山並みが見えて来た。アンナプルナ・マナスル・ガネッシュ・チヨオユー・エベレスト・ローツェ・マカルー等が識別出来る。

八千米級の山の他六千米、七千米の山が見事なヒマラヤ装を付けて、次から次と、目の前に迫ってくる、眼下には、氷河が横たわっている、エベレストも目の前にある。憧れの山を、遂にこの目で見た。午後カトマンズ市内の高台にある、ネパール最古の仏教寺院、スワヤンフナートに行き、高い所からカトマンズ盆地を眺め、のんびり過ごした。

翌早朝、再度空港に行き、トレッキングの出発地ルクラに向かった、十七人乗りの小型機だ荷物を沢山積んで、プルン、プルンと飛んで行く。カトマンズの市街地の上を過ぎると、地形図の等高線のように、山の上まで耕された、段々畑が、あちこちの斜面に広がっている。遠くのヒマラヤが見えなくなつて、両側に山の斜面が迫つた、谷間を飛行している。張り出した尾根を乗り越える時は、五十米位上をドッコイショで感じた。

着陸の合図があつたが、操縦席越しの前方も左右にも、山の斜面しかない、やがて前方崖の上に、四百米位の滑走路が見えた。着地すると、坂を上り土手の手前を、右折して小さな駐機場に入った。

チエックアウトをして、待合室を出ると凄いい人だかりだ。迎えのサーダーが見当たらない、目立つ所に目印のダッフルバックを置き、待つことにする、入れ替わり、たちかわりポータが来て、バックに手を掛け、荷を運びと云う、ノウノウと断るのに大変だ。

やがてサーダーの二人が、ボーイ一人を連れてきて、エージェンツのバッテリーに、案内された。午後、広場で毎週木曜日に、立つ定期市を見物、穀物、野菜、食肉、衣類、生活雑貨、何でも有り、地べたに敷いたシートの上に商品がゴチャゴチャ並べられ、客と値引き合戦をしている、騒然たるものだ。

空港に行き、大勢の見物人の、仲間入りして午後便の飛行機を見物する、我々も暇だが、暇人が沢山、いるもんだ。滑走路は、幅三十米位、長さ四百米位、十五度位の傾斜になっている、その先はストンと切れ落ちていて、航空母艦の様だ。飛び立つ時は、エンジン全開、坂を下つて、崖の手前で宙に浮き、谷間に消えていく。谷の向こうから、着陸態勢の飛行機が来て、着地すると、上り坂と可変ピッチで急激に減速して、駐機場に入る。

小さな飛行機から、荷物が出てくる、出てくる、乗客の手荷物他に、生活物資が沢山セメントまで出てくる。乗客と、荷物を下ろすと、すぐ飛び立っていく、駐機場には、三機しかプル出来ないので航空各社は、ピストン運行しているらしい。

夕方、飛行機も来なくなつて、キャンプ地に帰り、改めてコンデ・リー(6187M)を見ると夕日に、雪が金色に輝いている。今日からトレッキングの開始だ。

メンバーは、

サーブ(白那)井上智敦、田中豊明

サーダー(ガイド)頭アン・ニマ・シエルパ

サーダー助手、テジ・パファジユ

コック、ニマ・ソル

コック助手、ニマとX君 合計 七名

ゾプキョ(ヤクと牛を交配した家畜)二頭。

朝六時「サーフティ」と「コック助手がテントに、紅茶を運んでくる。

寝袋をまとめ、不要な個人装備を、ダッフルバックに詰め込んで、外に出ると、すかさず「サーフタトパニ」と、お湯を洗面器に入れて持つてくる。

七時の朝食までは、フリータイム、バッテリーで朝飯を済ませ、八時サーダと三人で出発。石畳の両側に民家、商店、土産物屋のある街を抜けて下り坂の道を、元氣に行く。

「ナマステ」「ナマステ」とポータ、日本人、アメリカ人、ヨーロッパ各国、アジア各国の荷物を持ったヤク、炊事道具の入ったドッコ(竹かご)を背負ったキッチンボーイやテール、イスを担いだ、ポーター等に、抜いたり、抜かれたりしながら、元氣良くエベレスト街道に行く。

スタッフの役割は、決められている。サーダーは全体を指揮、サーブと同行、案内役、小さなザックに個人装備のみ。

サーダー助手は、テント設置、宿泊用具等の運搬、ゾプキョの係、個人装備のみ。

コックは食事を作る、個人装備のみ。

コック助手は、炊事の手伝い、食事の後片付け、炊事道具の運搬、個人装備も含む。

各人がシステムチックに、誠実に役目をはたしている。テジとゾプキョも、コックも、ドッコを背負った助手も、我々を追い越して行った。コック達三人は昼食予定地へ、ゾプキョとテジは宿泊地へ先に行き準備をするのだ。

吊り橋を渡り、パクティンのキャンプサイトについて所々に、昼食の用意がしてあった。集落の出入口には、経文を彫り込んだマニ石があり、必ず左側を通るのが、しきたりである。

また民家の屋根には、タルチョー(経文が書かれた祈願旗)を付けた、竹竿が立っている。タルチョーは、大きなマニ石や、吊り橋、山の斜面からの綱に、沢山付けてある。チベット仏教民族の、強い信仰心の表れだ。街道はドワードゥ・コシ(ミルクの川)と云つた白濁した川に沿って続く、民家やバッテリー(茶店兼簡易宿泊所)のある、いくつかの集落を通過していく。

今日の宿泊地のモンジヨまで小さな上り下りの繰り返しをサーダーと「ヒスター」、ピスター「ヒスター」言いながら、キャンプサイに着いた。七時間歩いて、トレッキング初日は、無事終わった。

■第三十二回千葉県支部通常総会開催報告

支部長補佐 松本 宏

第三十二回通常総会を平成十四年六月十五日(土)、母校の千葉ニュータウンキャンパスにて総員六十名の出席で開催しました。小川支部長の挨拶に始まり、丸山理事長による「学園の現況」をパソコンとプロジェクタで判り易く説明して頂きました。

議事に入り、平成十三年度事業、決算、監査の各報告、平成十四年度事業計画、予算、役員改選(四名増員)、会則一部変更の総てが承認されました。

引き続き「情報環境学部の一年を振り返つて」と題して、中村尚五学部長による講演会を一般公開にして開催しました。時流に合った素晴らしい講演でした。講演後、息子をこの大学に入れて良かった」と頬を紅潮させていたお母様に会うことができました。

会場を福田ホールに移して懇親会を開催しました。来賓として学園理事長丸山孝一郎様、校友会理事長横田等様、大学同窓会副会長近藤史生様、学園常務理事宮本雅次様、校友会事務局長小田部宏様はじめ、校友会関係の多数の方々のご出席を頂きました。来賓祝辞に続き中村情報環境学部長に乾杯の御発声をお願いしました。終りに当り会の運営、会場設営など学園並に校友会事務局の皆様のご支援を頂きました。改めて御礼申し上げます。

尚次回総会は、平成十五年五月十七日(土)

AM 10 時より母校の千葉ニュータウンキャンパスにて実施。特別講演として宇宙開発事業団の森山隆氏(卒業生)による、「宇宙開発と地球観測」を同時開催 (詳細は工学情報春号御参照)

おれとお詫び

編集担当

原稿を予定通り執筆して頂き、ありがとうございました。この度の原稿は長文が多く、紙面に入りきれませんでしたので、個人広告を取りやめ、一部の原稿を短くし、さらに田中豊明様の「憧れのヒマラヤ・トレッキング」は約半分を次号への連載とさせて頂きました。

編集後記

松本 武

今年未年、癒し系のおとなしい動物ですが、なぜか未年には過去世界で大きな事件が起きています。今年モイラク、イスラエル、北朝鮮で何かが起きそうです。

国内では景気がますます悪化し、ゼネコン、銀行の倒産や合併が進む事でしょう。さらに東海地震の心配もあります。我国は戦争の当時国にならず、震災も起きない、平和で安全な一年であってほしいものです。

社団法人東京電機大学校友会
千葉県支部役員(平成14年度)

役名	氏名	電話
支部長	小川 重二	043-242-1539
支部長補佐	嶋田 建弘	043-232-4744
支部長補佐	松本 宏	03-5250-4142
副支部長	松本 武	047-370-1361
副支部長	徳久 昌之	043-295-1151
副支部長	田中 豊明	0439-67-0335
常任幹事	高橋 洋二	043-392-8311
常任幹事(会計)	花井 卓郎	04-7166-0206
幹事	山本 忠雄	047-378-4101
幹事	黒沢 昌弘	0476-32-2132
幹事	重崎 始	0439-55-9780
幹事	竹内 圭司	0436-60-8050
幹事	坂本 金治郎	043-291-2040
幹事	猪狩 俊明	0436-22-4656
幹事	篠崎 浩一	043-254-8151
幹事	畠山 忠之	043-423-4284
幹事	市川 勝利	043-485-5111
幹事	鈴木 繁雄	03-3270-7851
幹事	岡野 敦	043-227-9131
幹事	桜井 知明	0470-82-0267
幹事	大塚 武昭	043-271-2735
幹事	葛西 信司	047-475-7393
幹事	茂木 仁博	03-3455-0221
幹事	匠 勇治	047-437-1151
幹事	増田 修一	043-224-7921
監事	喜多村賢一郎	043-224-5161
監事	緒形久四郎	047-491-6671
相談役	山本 登	047-378-4101
相談役	竹内 保	047-353-2552
相談役	杉沢 順一	047-378-8951
相談役	小林 健治	047-365-4838
相談役	増田 隆一	0479-62-0204
相談役	関 泰雄	043-255-1911